

---

# 空色をかえて

shokocoa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空色をかえて

### 【Nコード】

N4803Y

### 【作者名】

shokocoa

### 【あらすじ】

ひっそりとファンタジー小説を読む事が趣味の鈴木美穂（主人公）が、同じ趣味を持っているらしい同じ学年の男子生徒から懐かれてしまう。しかも、その彼は端正な顔立ちで有名人なのだ。・・・そうして、主人公の平穏な日々が少しずつ変わっていく

## 出会いました

学校は楽しい。

適当に勉強していれば、どう過ごそうと自由だから。

「鈴村さん、居ます?」

いつものように自分の席で、親友と昼食をとっていると

「スズムラ」という聞き慣れた単語が耳に入ってきた。

自分の弁当箱や筆箱、さらには放り出したままの鉛筆の側面に

鈴村美穂（すずむらみほ）と書かれているのが目に入る。

ありふれた名字なので小さい頃から自分の持ち物には名前を書く癖がついているのだ。

という訳で、私を含めて5名のスズムラさんがこのクラスには居るので

フルネームで呼ばれない限り返事をしない。

だって、返事をして私じゃなかった！なんて恥ずかしい思いはしたくないでしょう。

そもそも友達の少ない私は親友の純（ジュン）ちゃん意外とはあまり喋らない。

だから”私では無い”と結論付けて、食事が続いていると誰かが私の前で立ち止まる。

「鈴村美穂さん？聞こえてるかな」

弁当箱から視線を少しずつ上へとずらしていくと見た事のある男子生徒が私を見ていた。

落ち着いた金髪で少し青みがかった目が私を映している。

えーっと、誰ですか貴男。あなた

この綺麗な顔・・・見た事はあるが名前を覚えていない。

微かに記憶されているのは同学年で、『喋った事のない人』という意味のない情報だ。

「私に用ですか」

思いのほか硬い声で返答してしまった事に、自分でも驚く。

いや、久しぶりに純ちゃん意外と会話するから緊張しているのよ。

頑張れ自分！と励ましながらぐつと顔は彼から反らさずに言葉を待つ。

「うん、用という程ではないけど・・・会いに来ただけだから。」

私の言葉に、困った表情をした彼はボソリと呟く。

「は？」

「またね、お姫様」

さらに意味不明の言葉を残して教室を出て行く。

「ええ？」

何あの人、電波でも飛ばしてそうで怖いんですけど・・・

未知なる物体に怯えている私は、クラス中の視線を集めていた。

純ちゃんは面白そうに目を細めて一言。

「どこで引っ掛けたの。」

「記憶にございません。」

ここ一週間を思い出してもあんな人と関わるような、特別に変わったことはしていない。

小首を傾げて私も純ちゃんに尋ねる。

「ところで、あの人は誰ですか」

\*\*\*\*\*

放課後、クラスメイトの視線を避けて辿り着いた図書室で私は読書に夢中になっている。

登場してくるのは妖精とか魔法使いとかドラゴンとか・・・とにかく現代社会とは大きくかけ離れたファンタジー小説というものだ。

幼い頃からこの手の本を読みあさり、今もお熱中しているのだから立派な趣味と言えるだろう。

「あつ、うつ」

ちなみにこの呻く<sup>うめ</sup>ような声は感動したときに勝手に出てくる。

表情筋も連動しているのだが、そんな顔を人に見られるのがいやなので

前髪は頬にかかるくらいの長さで表情を常時隠している。

今に限らず私の前髪は顔を隠している。

だって、教室でも読書するのだから見られたくないじゃないですか。

呻き声はいくらでも聞いてくださっても良いんですけどね。

はふう、ドラゴンが騎士に倒された中盤まで読み終えて

私は前のめりになっていた姿勢を正す。  
すると前の席に向かい合うように人が座っていて、にっこりと笑いかけてくる。

「つつつ！」

驚きに声を上げそうになったが慌てて口を塞ぐ。

お昼にあつたばかりの人物だ。確か・・・

「相模さん？」

私が小さい声で話しかけると彼は目を見開いて、更に笑みを深くする。

相模聡（サガミサトシ）2年3組の王子様。女性に甘く人気があるが彼女はおらず、

彼を狙っている女性が多く存在する。

・・・ファンタジーでいうならドラキュラとか似合いそう。

うん、最後のは個人的な意見だけど。

「鈴村さん、僕の名前知っていたの？」

それが標準の表情なのか、彼の顔にはずっと笑顔が張り付いたままだ。

筋肉つかれないのかな？

「生憎ですが、今日のお昼に貴男あなたの存在を認識したばかりです。」

考えている事は言葉にせず私は応答する。

知らない人と話す時は、大体ムスツとした口調になるのは仕方ない。不安と緊張と、人見知りなのだから。

とりあえず、お昼にも言った台詞をもう一度。・・・電波な答えが返ってきたら逃げよう。

「相模さん、何か御用ですか。」

少し低めに声を出す。

こんな地味な女に何の用があるのか。

私は早く、落ち着いた世界に戻りたいのだ。

無駄に端整のとれた美男子が隣に居ては、本に集中したくともできない。

その証拠に、いつもは静かな館内がピンク色のオーラでも纏っているような

女生徒でザワツいているのだ。

しかも、視線が相模さんに向けられている。

明らかにこの甘くて落ち着かない雰囲気の原因はこの男だ。

図書館という聖域に、魅了<sup>チャーム</sup>魔法を使うような魔物はいないのだ！と心の中で叫んでいると、彼の指先が私の本へと向けられる。

「鈴村さんとは趣味が合いそうだから友達になりたいんだ。」

はてな？

この人は何を言っているのだろうか。

「僕もね、好きなんだよ。特に冴村っていう作家のファンタジー小説とか」

私は、先ほどまで『あっちいけー！』と思っていたのを一瞬忘れて目の前に座る男子生徒をまじまじと見つめる。

そして、

なんで私がファンタジー小説好きなの知っているの？という恐怖心と私も冴村先生好き！というのを言った方が良いのか？という困惑と

この人は危険人物なのだろうかという猜疑心と・・・

「明日も図書室来るよね？」

彼が問いかけた事に気づかず、うっかり頷いてしまう。

「じゃあ、また明日ね。」

そう台詞をのこして図書室を出て行く彼の後ろ姿を私は頭痛のする  
思いで見送っていた。

「・・・明日も会うのか・・・。」

苦々しくかみ殺した文句は誰にも聞かれなかったはずだ。



## 出会いました（後書き）

初めての小説（処女作）で、緊張しています。頑張っ  
てかき終えた  
と思います！

## 出会いました1

三時限目が終わると唐突に質問された。

「その後は何もなし?」

眉間にシワを寄せて迫ってくる親友に、私は上機嫌に頷いている。

あの『お友達』や『また明日ね』発言から3日が過ぎた。

私は”放課後”ではなく”休み時間”を利用して図書室に行っていた。

なので王子に会う事なく、いつもの日常生活だ。

少し違うのは、帰宅時間が早くなったことくらいだが

「静かに読書ができて満足」

嬉しい声で宣言をすると彼女は短く舌打ちをする。

「ちっ!絶対に面白い事になると思ったのに」

「純ちゃん・・・」

私は苦笑しながら目の前の親友をみやる。

これといった特徴はなく、少し低い鼻に少し小さな唇。

切れ長な一重まぶたは冷たい感じはしないが、優しい印象も受けない。

岩里純(イワサトジュン)。平均的な日本人顔だ。

ただひとつ印象に残るとしたら、彼女が腹黒い一面があると言う事。

「だって、楽しい事には心が躍るでしょう」

真顔で語る顔に『楽しみの餌になれ』と書いてあるのが見える。

ので出来るだけ重く一言。

「純ちゃん、一緒に踊らせてあげようか」

彼女の眉がぴくりと動く。

更に言葉を続ける。

「渡辺先輩と昨日の夜、こ」

途中で台詞が途切れたのは彼女が私の口を塞いだからだ。

「・・・」

「・・・」

無言でお互いに圧力をかける。

先に動いたのは彼女だ。

「不毛な戦いはナシ！ってことで、どうでしょうか」

私は口を塞いでいる彼女の手をどかして「異議なし」と答えた。

たわいもない話をしていると10分の休憩時間が終わる。

変化のない日常は大好きだ。

次は数学かぁ。

このとき、一時間後には非日常になるとは知らずに私は安穩としていた。

「じゃあ、明日は46ページからだ。予習してくるように」

終了1分前。

数学教師の間延びた声を聞きながら、ノートを閉じて教科書と机にしまう。

この先生授業は、あまり人気がない。

黒板にビツチリと数式を書き込むからだ。

今は5月だが、2年生になって買った数学のノートは1冊を終え、2冊目に突入していた。

周りを見渡すとまだ写生し終えてない生徒が沢山いた。

皆の頭の上に焦った様子で『お昼休み！』の文字が見えてくる。

学校には大きな駐車場が完備されていて、お昼時間になると弁当屋が立ち並ぶ。

弁当を持ってきたくない者が敷地外に出てサボらないようにするためだ。

チャイムが鳴ったら走って弁当を買いに行く者は多い。

勉強の時間に敷地外に出ようとすると、警備員が止めてくる。

この時点で外のコンビニには行けない。

（ちなみに強行突破しようとした生徒は学生証を提示させられ、担任である教師がついてくる。

もちろん担任は不機嫌極まる。昼食時間を削がれるのだから。）

という訳で、うちの学校では「食べて、遊ぶ！」という健全な昼食時間が主流だ。

「じゃあ、今日はここまで。」

先生が言うのと同時にチャイムが鳴り、お弁当という宝を巡る戦いが始まった。

「熱いですな。」

純ちゃんが感心したようにパチパチと拍手を送る。

「そうだねえ、がんばれ〜〜」

私は猛ダッシュで宝を追い求める勇者達に声援を送る。

私と純ちゃんは、毎日お弁当を持ってきたので不参加だ。

「では、いただきますか」

鞆の中のお弁当を取り出そうと前のめりの体制になる。

「鈴木さん」

何だか聞き覚えのある声が・・・とりあえず、お弁当とってからにしよう。

ゆっくりと鞆から目的物を取り出して私は顔を上げた瞬間に小さく悲鳴を上げる。

「ひっ！」

三日ぶりにみた王子は薄い笑みで私を見下ろしていた。

「久しぶり。図書室に行っても会えないから来たんだけど？」

ブリザード魔法でも使っているのではないかと思うくらい空気が冷えていく。

まっ負けるものか。

「そうですか、でも貴男に会う約束をした記憶はありませんよ。」  
声が震えないようにゆっくりと喋る。

「でも僕『また明日』って伝えたよね。」

伝えてきたけどそれが何ですか。

「私は図書室に行くとだけ約束しましたよね。」

ぴりぴりとした口調でそう告げると彼は目を細める。

ネコが獲物を捕らえる時と一緒の雰囲気だ。

怖い！何！？

「『また明日も会うのか』って言ってたよね。」

冷や汗が背中を流れる。

「聞こえて・・・」

あの距離で良く聞こえましたね。  
どんな聴覚してるんですか貴男。

「だから会ってくれると思い込んで、放課後の図書館で待ってたんだけどね。」

まさか、休憩時間に通ってるなんて・・・ねえ」

最後は問いかけるように視線を向けてくる。

ううゝ、私は手詰まりとなり謝罪する。

「スミマセンネ」

心が籠ってないのがせめてもの反抗だ。

「うん、じゃあ宜しく。」

「えっ？何を？」

私は意味がわからないという顔をする。

前髪でわからないと思うが・・・

戸惑っているのは声で把握できたようで彼が当たり前のように告げる。

「喧嘩して、仲直りもしたし。」

友人になってくれるでしょう。」

それは遠慮したい。

と言いつうになつたが会話を聞いていたのであろう生徒の視線が集まっている事に気がついた。

特に女子の視線が刺さる・・・

「王子を待ちぼうけさせた上に断るつもりじゃないでしょうね」

という声が聞こえてきそうだ。

純ちゃんは、ニヤニヤしながら傍観を決め込んでいるし・・・  
考えるの、面倒くさい。

そう判断した私は溜息を飲み込んで「よろしく」と答えたのだ。

## 出会いました2

逃げ回った結果、（半強制的に）トモダチになった相模さんは男女ともに人気がある事を知った。

「頼む、バスケの助っ人お願いできないか！」

上級生であろう男子生徒から依頼があったり

「来週から調理部での試食会あるので先輩も来ませんか？」

下級生から試食をお願いされたりと、目の前の人物は色々な人から声をかけられている。

（命名）王子はその全てを理由を付けて柔らかく断っていく。

が、女子生徒は王子目当てのお誘いだ、簡単には引き下がらない。

「相模先輩、放課後の1時間だけでも良いんです。」

「ごめんね。僕もやりたい事があるから。」

「でもっ」

「ごめんね。」

しかし、謝罪の言葉で圧力をかけて遮ってしまう王子。

彼と知り合って1週間が経過している。

放課後の図書室で向き合う形で座って読書するのが日常化し始めているが

優しく威圧的に断りを入れる風景も見慣れてきた。

そして、もう話はないという雰囲気捉えて女生徒は立ち去る。

一瞬・・・睨まれたのは気のせいだろうか。



「読書中に騒がしくなつてごめんね。」

女生徒が完全に退室したのを確認して彼が申し訳なさそうに顔を顰<sup>しか</sup>め、

少しくすんだ青い瞳が長いまつげで隠れてしまう。

「明日からは、こういう事は無いようにするから。」

その言葉を直訳すると”明日からも放課後に図書室で会う”

ということに気づくが、逃げてでも無駄という事は実証済みなので頷く。

「そうして下さい。」

\*\*\*\*\*

ファンタジー小説で一番好きな所は、お姫様がピンチの時に英雄が登場する場面だ。

「あんたみたいな地味女、ただの遊びに決まってる！」

「相模先輩を独り占めするのは許せない！」

「ていうか、気持ち悪いし邪魔だし！」

図書室に向かう途中の出来事だ。

あまり使用されていない様子の資料準備室に連れ込まれ、数分前から罵倒されている。

女生徒三名。

顔を見ると昨日みかけた調理部がいたので、下級生だと断定できる。睨まれたのは気のせいでは無かったようだ。

鈴村美穂<sup>すずむら みほ</sup>ただいま人生初のピンチに陥っております。  
落ちて自分と言いついて聞かせ、どうしたら良いのか頭を回転させる。

この娘<sup>こ</sup>たちは王子に好かれたんだよね。

じゃあ、私に突っかかるのではなく彼にアピールした方が効率的でしょう。

なぜ私に抗議しにきたのか、わからない。

「私にあたる時間があれば、相模さんに会いに行けば良いのに。」  
思わず発した言葉だ。

次の瞬間、突き飛ばされて体が後ろに倒れる事に恐怖を感じる。  
幸いにも体に傷ができるような障害物が倒れ込んだ先にはなかった  
ので、

変な怪我もせず、体を打ち付けただけですんだ。  
頭を打たなくて良かったと安心したのも束の間。

「しばらく、ここに居なよ。」

リーダーらしき女生徒の<sup>こぶせ</sup>呟きに顔を上げると、教室の扉が閉まる。

まさか！

私は慌てて扉を開けようとドアノブに手をかけるが、遅かった。  
鍵が掛かっている。

そして遠くに走り去る彼女達の足音。

「閉じ込められた……。」

扉はひとつ、外鍵が掛かっている内側からはあけられない。  
窓はあるが私の体を通るような幅ではない。

万が一出れたとしても3階なので死んじやうかもしれない。  
自力では出れない。

焦りながらも他に部屋から出る方法を探す。

天井の蛍光灯が目に入る。

そして扉の横にはスイッチ。

そっと押してみると、明かりがつく。

・・・夜になって、警備員が見つけてくれるまでの辛抱だな。

結論が出て、冷静になった私はいそいそと本を取り出す。

部屋の奥には使われなくなったソファが何個か置かれているので腰掛ける。

暗くなっても明かりは確保できているし、警備員の巡回も何時間か後だろう。

背表紙のざらつとした独特の感覚を楽しむように、撫でる。

「ふふふ。」

一人の空間で読書が出来るのが嬉しくて笑いが出てくる。

先客が居ると知るまでは・・・

「ねえ、何がおかしいの。」

背後から声をかけられて、驚きのあまり背筋が伸び変な叫び声を上げてしまう。

「ひあっ！」

「ふうん。可愛い声。」

声の主を見るために振り返ると、気怠げに少年が真後ろで寛いでいた。

人が居るとは思っていなかったなので私は驚きで動けずに居る。  
すると、少年が手を伸ばし私の制服を引っ張る。

予想していない行動に体が反応しきれず彼に寄りかかる体勢になっ  
てしまった。

「温かい。」

耳元に低い声で囁かれて緩く抱きしめてくる。

呆然としているとゆっくりと首筋に顔が息が・・・うわ！！！！  
「気持ちわるっ」

自分の置かれている状況を把握した途端に背筋に悪寒が走り、思い  
切り叫ぶ。

腕の中から逃れようとものがくが微動だにしない。

「うわあ、傷つくう」

見知らぬ少年は棒読みのままゆっくりと体を離れた。  
どうやら解放してくれるようだ。

私は急いで体を離そうとしたが、腕をつかまれ距離を取る事に失敗  
する。

「そんなに慌てなくても、まだ何もしてないのに。」  
何もなくていいです！

「ねえ、前髪邪魔じゃないの？」

彼が私の顔を覆う前髪をわけようと手を伸ばしてくる。

仰け反るように避けると鍵が掛かっていたはずの扉が勢いよく開く  
のが見えた。

そして、扉を開けた人物が私たちを視界に捉えたと眼を細める。

「・・・その手、どけてもらえないかな。」

躊躇する事無く私を少年から引きはがす王子。

ここに閉じ込められた原因は彼の所為だという事は忘れていないが、  
見知らぬ少年から私を救い出す相模さんが救世主に見える。

## 出会いました2（後書き）

なんだか、話の収集がつかなくなってきた・・・？  
最後まで書ききるのを目標にがんばります！

### 出会いました3

手を握られたまま、資料室から足はやに遠ざかる。

「えーっと相模さん？もう平気だから。」

1階へと続く階段の踊り場にさしかかったときに恥ずかしさのあまり呟く。

手を離してほしい。

放課後で生徒が少ないとはいえ、手を繋いで歩いているのは悪目立ちする。

早く距離を取りたいと私が考えているのがわかったのか、握りしめられていた手が解かれる。

思っていたより強く握りしめられていたようで、私の手はほんの少し痺れている。

手を動かして痺れを紛らわせていると、硬い声が耳に入る。

「鈴村さん、あの子達には注意しといたから。」

「・・・え？」

理解するのが少し遅れたが、私を閉じ込めた娘たちのことだと合点がいく。

どうやら彼女達は私を放置した後に彼に会いに行ったようだ。

そこで、どうやって私の事がバレたのかは気になるが・・・。

まずは、助けてくれたことと彼女達に注意してくれた彼にお礼を言わなければ。

「ありがとう。」

私が感謝の気持ちを告げると、彼は困った様子で小さく呟く。

「・・・本当にごめん。」

責任を感じている彼にしょんぼりと垂れている耳と尻尾が見えたきがした私は笑ってしまった。

「別に良いのに。ふふ。」

そして、一気に震えがくる。

資料室での出来事が脳裏に焼き付いている。

知らない男性ひとに抱きしめられて

「怖かった」

そう、平常心を保っていても怖かった。

閉じ込められた密室で、知らない人間に好きなようにされるのがとても怖かったのだ。

涙が出そうになり、慌てて目元をこする。

泣いてしまったら相模さんが困るだろうし、人様に見せられる泣き顔じゃないからね。

私は笑顔で彼と向き合う。

「うん、これくらい大丈夫です！」

「……これじゃ同じだ。」

同じって？

私の頬に彼は手を伸ばす。

指先はとても冷たく、そこから私の体温を奪っていくようだ。彼はそこに私が存在するの確かめるように触れてくる。

「鈴木さんは……もつと警戒心を持ったほうが良いよ。」

哀しげな瞳を向けられて、私の記憶に何かがひっかかる。



こんな瞳を以前にも見た事がある。  
でも、どこで見たのかも誰が向けた瞳だったのかも・・・霧がかか  
ったように思い出せない。

「今日はもう遅いから、駅まで送るね。」

頬に触れていた手が離れ、王子は笑う。

先ほどの暗い気配は、どこにも無かった。

\*\*\*\*\*

誰もいない自宅に辿り着いた私は

いつものように着替えを取りお風呂場へとむかう。

温めぬるの水を湯船にためながら、シャワーで汗を流す。

さっぱりした所で、自分の太ももに視線を落とす。

右足の付け根から膝へ薄らと傷が入っている。

小さい頃に出来た傷らしいが、どうして出来たのが覚えていない。  
霧がかかったように思い出せない。

「王子の瞳を見た時と一緒に・・・。」

もしかして、幼い頃にあった事があるのだろうか。

明日にでも聞いてみよう。

そして今日は、眠る前にあの本を読もう。

私が大好きな『月と狼』。

出会いました3（後書き）

伏線を消費しようとしたら増えた（汗）  
次話では必ず1つ以上は謎を解きます。

## 出会いました4

”月と狼”

森の奥に一匹の狼が暮らしていました。

お月様は、狼のことをいつも見守っていました。

何故なら、狼の毛は真っ白で

ふわふわでしたが夜になるとお月様の光に包まれて

お月様と同じ、優しい銀色になるのです。

太陽の光を受けてばかりのお月様は、

同じ色に染まってくれる狼が大好きで見守っていました。

狼は、とても優しい心の持ち主でした。

しかし

大きな口に鋭い目。

恐ろしい顔をしていたので森の皆から怖がられていました。

狼には家族もトモダチもいません。  
でも狼は寂しくありませんでした。

狼は銀色に染まった姿を

森の湖で見るたびに、お月様と一緒にいるようで  
独りじゃないと思えたのです。

森の湖で

狼は、お月様に毎日話しかけました。

お月様は毎日、優しい光で狼を照らし出しました。

お互いに穏やかな毎日に幸せを感じていました。

あるとき終わりが来ます。

森で狩りをしていた王様が偶然、

月の光を受けた狼を見かけてしまいました。

城に帰った王様は召使い達に言いました。

” 森に銀色に輝く狼がいる。私はあの美しい毛皮が欲しい  
さらに言葉を重ねました。

” 美しい毛皮を持ってきた者には、褒美をやるう”

王様の号令で国中の男達が動き出したのです。

\*\*\*\*\*

「<sup>じゅん</sup>純は、居るか。」

昼食を食べ終わると、後ろから声をかけられる。

ああ、いつ見ても切れ長の一重が親友とそっくり。

「さつき、渡辺先輩のところに行くって出て行きましたよ。途中で会わなかったですか。」

声をかけてきたのは、無表情な渡辺先輩だ。  
親友とは遠い親戚らしい。

とても仲が良いようで、2人でいるのを頻繁に見かける。

「いや・・・小さいから見逃したか。」

180?はあるだろう先輩は、本気でそう思っているらしく溜息をついた。

そして、いつの間にいたのか先輩の後ろに親友が仁王立ちしている。

「孝道、誰が小さいって? あんたがデカ過ぎるだけでしょう!」

「そうか? すまん。」

なぜ怒っているのかわからないという顔をされた身長150?の親友は呆れたようだ。

「人が気にしている身長を言うからよ。」

「・・・すまん。」

彼女の言い分を理解した先輩は気まずそうに謝る。

「だが、純は可愛いから大丈夫だ。」

どうやらフォローしているようだが、その言葉に親友は真っ赤になる。

「くっ! むかつく!」

小さく文句を言うが、反撃はしないらしい。

そして、私はふと思い出した。

「そういえば、二人は何か用事があったんじゃないの。」

純ちゃんは、はっと顔を上げて叫ぶ。

「ああ！生徒会！」

今度は先輩が呆れたように歩行を促す。

「忘れてたのか？行くぞ。」

「何よ。その手は・・・」

「俺の彼女だと周りに牽制けんせいをする。」

「はあ！？」

ふーん

いつの間に付き合いだしたのかなあ。

手を握られ、ずるずると引き摺られる親友をじと目で見送る。  
が、幸せそうで何よりだ。

比べくらて

私は読書している時が幸せだと思っていたが  
最近、落ち着かない。

原因はわかってる。相楽さんが来ないからだ。

あの日から彼は教室にも図書室にも現れなくなっていた。  
関わりたくない時には居るのに・・・と思っ  
ていても仕方ない。

「毎日来てたのに、どうしたんだろ。」

ぽつりと呟つぶいてしまう。

そして、彼が居なくて寂しがつているように聞こえる独り言に私は  
恥ずかしくなる。

私の胸中の霧は未だに晴れていない。

質問しようとしていたら会わなくなつたので、余計気になっている  
始末だ。

・・・仕方ない、彼を訪ねに行こう。

教室の時計を見ると休憩時間が残り15分だと確認する。

15分なら話も出来るだろう。

私は重い足取りで、二つ隣の教室へと向かう。

彼の教室に、すぐにつく。

「すみません、相模さんはいらっしゃいますか。」

私は、教室に入ろうとしていた女生徒に話しかけた。

「相模君？教室には居ないけど・・・少し待ってて。」

彼女は面倒という様子を出さずに、走り出した。

「あ！待つ・・・」

待つてください。という声は届かないだろう。

彼女は廊下の彼方にいた。

他人の教室の前で居心地悪くしていると親切な女生徒が戻ってくる。

彼女の後ろには、相模さんがついてきていた。

所要時間にして1分半くらい。

”少し待ってて”の言葉は本当だった。

「ありがとうございます。」

私がお辞儀をすると女生徒は”どういたしまして”と返して教室へと入って行った。

目の前に立っている相模さんへ視線を移す。

今、彼の顔にはどんな感情も映っていないが瞳には私だけがいる。

「聞きたい事があります。」

このとき、少しだけ声が震えているのは  
久しぶりに見た彼の瞳に捕らわれたからなのか自分でもよくわから  
ない。

「幼い頃に私と会っていますか。」

ゆつくりとはつきりと聞こえるように質問する。

「それは・・・」

少し掠れた声が漏れてきたが、

私は目の前の人物がはぐらかさないように  
しっかりと目を見つめてもう一度、訊く。

「私と会ってますか。」

すると、彼はぐつと眉根を寄せて話だす。

「父も母も黒髪に黒目だけど、僕の前髪と青い目は生まれつきなん  
だ。」

父方の祖父が外国の人で、隔世遺伝したみたいなんだ。

両親は可愛がってくれたんだけど、幼い頃の僕にしてみれば、  
この容姿は劣等感以外の何モノでもなかった。」

笑顔も消えて、彼は苦しさを耐えきれないように顔を歪める。  
しかし、声は濁らず言い切る。

「だから初めて君に会った時、俺は救われたんだ。  
そして、君を傷つけてしまった。」

「・・・」

私は思わず自身の太ももへと手を動かす。  
その動きに気づいた彼は更に眉間に皺を寄せて断言する。



「俺のせいで出来た傷だ。」

その言葉を良い終えると、沈黙の時間が流れる。

私はどうしようか悩むが  
目の端に入った時計を見て声をかける。

「今日の放課後、待ってます。」

彼が頷くのを確認して自分の教室を目指す。

休憩時間は残りわずか。

15分では足りなかったようだ。

それにしても、一人称が”俺”になった。

あれが本来の喋り方なのか？

## 出会いました4（後書き）

細々と書き綴っていますが、見苦しい箇所がありましたらすみません。

## 出会いましたら過去からの

まだ陽が落ちる時間ではないので、まだ室内は明るい。  
しかし、図書室の片隅は雰囲気がとても暗かった。

学業の時間から解放された私と王子が無言で向かい合っているからだ。

王子の顔は酷く沈んでいて、ヒドいものだが

伝えておかないとこれからの話で差し支えが出るとみ事を申告する。

「最初に謝つときます。私、相模<sup>さがみ</sup>さんの事は覚えていません。」  
その言葉に反応するように彼は、寂しそうに応える。

「うん、そうだろうと思ってた。」

申告がすんなりと受理されたので、私は驚いたが今までの彼の言動を考えると

”覚えていない”ことは想定済みだったのだろう。

「えっと、話の続きをしてもらえますか。」

私が覚えていない記憶。

彼にはしっかりと残っている記憶。

気になってしょうがないのだ。

長く息を吐き、彼は姿勢を正して喋り始める。

「・・・僕は、皆に嫌われていた。

この容姿の所為もあるけど、大きな原因は僕の知的成長が遅れていて喋らなかったから。

目立つ存在なのに喋らない僕が気味悪かったんだと思う。

幼稚園の年長組に上がった頃から悪戯<sup>いたずら</sup>をされるようになった。

小学校にあがると陰湿な悪戯いたずらになっていった。」

私は話を聞くうちに、顔が険しくなっていく。

小学校1年の悪戯いたずらにしてはレベルが高いからだ。

提出したノートが黒く塗りつぶされて返ってきたり、教室の清掃を全て任された後に汚されたり。

大人には気づかないように、うまく誤摩化ごまかせる範囲の出来事だ。

彼は、放課後になると更なる苛めいじを恐れおそれて走って帰宅していたそうだ。

頷きながら私は聞き入る。

「いつものように早く帰ろうと思って、靴がない事に気づいた。」

靴がなければ、上履きで返るしかない。苛められていることがバレてしまう。靴をなくした事を両親に怒られるのも怖い。大人に報告されたと思われて更に虐められるのも怖い・・・と独り言のように語る。

うん、子供ながらに悪循環に捕とらわれていた彼に同情しそうだ。

「でも僕は学校の中を探し始めて、見つけたんだ。」

彼の遠くを見ていた瞳が私に向く。

「僕の靴を大事そうに抱えている女の子を」

\*\*\*\*\*

『あの・・・それ、・・・』

大事そうに靴を抱える女の子に僕は怖々と声をかける。  
靴を盗ったのが、この女の子かもしれないからだ。

彼女は僕が声をかけたのも気づいていないようで、振り返らない。  
しかし、返してもらわない事には帰宅出来ない僕は出来るだけ大きな声を出す。

『っそれは、僕の靴です。』

少しか責めるような言い方になってしまったが、今度はちゃんと  
声が届いたようで  
女の子が振り返る。

前髪を眉上で切りそろえ、肩下まで伸びた黒髪がゆれ、  
ほんのりと色づいた頬が彼女の肌が白いことを強調する。  
人形みたいに可愛い。

『人間？・・・これ、君のなの？』

少女の疑問に頷くと、落胆したように肩を落とす。

『むうゝ人間か。・・・はい、返すね。』

少し唇を尖らせると、すぐに笑顔になり僕に靴を渡してくれた。

この感じからすると、盗ったのは彼女ではないようだ。  
ほっとした反面

なぜ彼女が持っていたのか気になったので質問してみる。  
すると、不思議な答えが返ってきた。

『精霊さんをつまえる呪文を唱えたら、靴が現れたの！』  
興奮気味の彼女に圧倒されながら僕は話の整理をする。

図書室で”ひとり”魔術師ごっこをしていたら、呪文とともにドンという音がした。

驚いた彼女は、音のしたガラス窓をみやる。

そして、今の呪文が成功したのかと思い喜々として向かった先に”現代の靴”を見つけたのだ。

あたりを見回しても誰も居ないので、きっと精霊さんの落とし物だ！と思い大事に抱えて持って帰ろうとしていた・・・ということだ。彼女の仕業ではないのに、責めるような言い方をしてしまったことに罪悪感を抱く。

『勝手にもって帰ろうとして、ごめんなさい。』

『大きな声だしてごめんなさい。』

ふたり同時に謝罪してお辞儀したものだから頭がぶつかり、しゃがみ込む。

『・・・・・・・・ふつく。』

お互いに視線があつた瞬間に笑いだす。

どうやら彼女も、不可抗力ではあるが他人の物を”盗ってしまった

”という罪悪感があつたようで緊張していたようだ。

笑い合つて、僕らは友だちになった。

そして、初めてのトモダチが出来た僕は放課後になると図書室に通う。

図書室で読書をする彼女に付き合い、感想を聞き、共感する。

そんな毎日を送る中気になったのは、彼女が常に独りだということだ。

人より妄想癖が強い意外は、良い子なのに僕以外のトモダチと遊ん

でいるのを見た事がない。

もしかして、僕の所為<sup>せい</sup>で友だちが居なくなっているとかじゃないよね？

・・・。

『みほちゃん、僕と遊んでて楽しい？他の友だちとも遊びたいんじゃない？』

『さと君と一緒に楽しいよ。後ね、ずっと一緒にでも楽しいはず！』  
きよんとした表情で返答された。

彼女は何事も無かったかのように読書に戻っている。

僕は今までに言われた事のない言葉に、顔が真っ赤になるのがわかった。

それから数分もしないうちに、彼女は笑顔で顔を上げた。

『さと君。ケイヤクしよう！』

『ケイヤク？』

『うん、みほもさと君が”（さみ）寂しくない”ように約束事をするの！』

『ここにも載ってるよ！』

彼女が指した先には、お姫様と騎士がお互いに信頼しあっている・想い合っている証として、お互いの指先に唇を落としていた。

僕は恥ずかしくなり後ずさる。

どうやら、心の絆を深める儀式のようだけど・・・ちらりと隣の彼女をみる。

彼女は乗り気のようで、すでに手を差し出していた。

『みほちゃん、本当にするの。』

恥ずかしさのあまり涙声になっている僕に、彼女はキラキラ期待した瞳を向けてきたので、観念する。本に描かれている通りに動作する。

「『すべてを貴方へ』<sup>あなた</sup>」

みほちゃんは僕の手を、僕はみほちゃんの手を取って短い呪文を唱えてから手の甲へ唇をつける。

そして、彼女の提案で僕は”騎士様”となり彼女は”お姫様”という役割を得たのだ。



## 出会いました6 過去からの

私は遠い目をして相模<sup>さがみ</sup>さんの話を聞いている。

小学1年で精霊さんや魔術師ごっこをするのはまだ可愛げがある。しかし、手の甲<sup>せつぽん</sup>とはいえ接吻<sup>せつぽん</sup>するとはアホすぎる。

目の前にいる男性<sup>ひと</sup>は端正な顔立ちの所謂<sup>いわゆる</sup>美男子だ。

成長過程<sup>せいしやう</sup>とはいえ、幼い頃の彼にチューを強要<sup>きやうよう</sup>する私を想像する。立派な痴女<sup>ちじや</sup>ではないか・・・恐ろしい。

心の中で身もだえている私に気づかない彼は話を続けている。

「僕にとって初めて出来たトモダチ。お姫様は特別だったんだ。でも僕は君を、裏切ってしまった。」

\*\*\*\*\*

図書室の入り口についた時、内側から派手な音と女の子たちの笑い声が聞こえた。

何だろうと思ひ扉を音がしないように少しかだけ開け、中の様子を窺<sup>うかが</sup>うと僕の”お姫様”が複数の子と対峙<sup>たいじ</sup>しているのがわかった。

「みほちゃん、本ばかり呼んでるから猫背<sup>ねいぜ</sup>だね。おばあちゃんみたい。」

「本をよんでいる時も、ぶつぶつ呟<sup>つぶや</sup>いているし気持ち悪い。」

「読書している間、顔もどんどん変わるし気色悪<sup>きしよくわる</sup>い。」

「だから、今から可愛くしてあげる。」

親切心だと言わんばかりに、彼等<sup>かれら</sup>は”お姫様”から本を奪い取り力

任せに破いていく。

止めてつと言う声が室内に響くが室内には彼等と彼女だけ。

一人で複数を相手に出来る訳が無く、本は最後まで破かれてしまった。

僕の居る場所からは”お姫様”の顔はわからないが、彼女は手を握りしめている。

俺は、助けに入らなかった。

自身に向けられる彼等の仕打ちが怖くて、動く事が出来なかった。

「読む物が無くなれば、呟かないし、変な顔にも変わらないね！満足げに言った男の子が残骸になった本を彼女に押し付け、醜惡な笑顔を見せる。

「イメチェンも手伝ってあげる！

どこから持ってきたのか、手には鉋が握られている。

複数名が押さえつけようと”お姫様”に近づくが、彼女は慌てて身を翻す。

でも、取り囲むモノから出られず”お姫様”は押し倒される。

男の子に前から馬乗りになられ、髪を強く引っ張られた彼女を周りの子達が嫌な笑顔で迎える。

じゃきつ！

肩下まであった黒髪が一気にショートになった瞬間、彼女は恐怖を露に叫び、暴れだす。

予想外に力が強かったのか、彼女が暴れた反動で馬乗りになっていた彼が体勢を崩した。

彼の握っていた鉋の刃が彼女の肌を傷つけ、血が流れるのが見えた。

『きゃあああああああ！』

より一層、高い声が響き渡る。

俺はその場から駆け出していた。

その後、寂し<sup>さみ</sup>そうに図書室にいる”お姫様”を俺は遠くから見ているだけだったが、両親の都合で引越<sup>ひきこ</sup>しをすることになった。

結局、俺は”お姫様”とは一度も会わずに転校した。

\*\*\*\*\*

話を終<sup>お</sup>え、言葉を切る王子は背後から負のオーラを出している。

幼い頃に出会った(らしい)相模<sup>さがみ</sup>さんと私。

どうやら、お互いに虐<sup>いじ</sup>められっ子だったようだ。

私自身には虐<sup>いじ</sup>められていた記憶はない。

だが、私に起こった事柄<sup>ことがら</sup>に彼は罪悪感を持っている。

多分、見捨てたとか助けられなかったとか思っているのかな。

そこまで整理して私は口を開く。

「相模<sup>さがみ</sup>さんがヘタレなのは、わかりました。」

思いのほか重い口調になってしまい、更に王子の顔色が暗くなっていくのを見て、慌てて言葉を追加する。

責めたい訳ではないという事をわかってもらわないとね。

「多人数を相手に飛び出すのは脳みその無い人のする事です。怪我をしてしまったのは私と襲いかかってきた子たちの責任です。決して、相模さんの所為じゃないんです。」

その場を目撃したとしても、仲良く犠牲になる事は無い。

逃げて良かったんだよ〜っと思えるのは、当時の記憶が無いせいかも知れない。

しかし、太ももの傷を制服の上からなぞっていたら言っではいけない本音が出てきてしまった。

「早く、助けを呼べば傷も付かなかったのかな。」

言った後に、はっとして顔を上げると彼の表情が瞬く間に歪んでいく。

そして、俯いてしまう。

つつうあゝゝ！

責めたい訳ではないのに、何気ない一言が彼を沈める要因になるのが嫌だ。

私は彼に向けて言葉を投げる。真っ直ぐに伝わるように。

「相模さん、貴方が気にすることは何一つないんです。」

彼は顔を上げて、私を見ると表情を緩め席を離れて私の隣に移動する。

訳が分からずに彼の動向を見守ると隣で深々（ふかぶか）と頭を下げられてしまった。

「・・・ありがとう。俺の優しい”お姫様”」

小声で囁く声が嬉しそうだ。

でも、私は早く礼を崩してほしくて必死になって隣に座るように促す。

彼は苦笑いで隣の席につく。

彼の瞳は明るさを取り戻したようで、綺麗な碧眼<sup>へきがん</sup>が私を見つめている。

直視されると恥ずかしいと考えて私は視線をそらす。

しばらく沈黙していると、彼が私に言った。

「じゃあ、改めてよろしく」

今の台詞<sup>せじふ</sup>に私は嫌な予感がしてゆっくりと後ろに身体を引こうとすると、素早く彼に二の腕を掴<sup>つか</sup>まれ捕獲<sup>ほかく</sup>されてしまった。

彼の思惑<sup>うかが</sup>がわからずに表情を窺<sup>うかが</sup>うと、目を細めて艶<sup>あで</sup>やかな笑みを浮かべている。

半強制的に王子とトモダチになった状況<sup>じき</sup>を思い出す。

この顔、獲物を狙うネコ科の目だ。

でも、あの時とは違い色気がある。

・・・ちよつと、怖いんですけど！何これ！

ぐるぐると回る思考の中、王子の手が私の手を片方ずつ握りしめる。そこで思い当たるのは、先ほどの話だ。

「相模<sup>さがみ</sup>さん、この手はなんでしょうか。」

私の質問しに、当たり前のように答える王子。

「契約<sup>けいやく</sup>に決まってるでしょう。」

答えを聞いた私は反論しようとしたが、相模<sup>さがみ</sup>さんが遮<sup>さえぎ</sup>るように喋りだす。

「俺は、”お姫様”のことをずっと忘れられなかったんですよ。それなのに、”お姫様”と呼ばかけたら避けられ怯えられ、

あげくの果てに俺の事を覚えていなかった。

最初はそれでも良いと思っていたけど、油断していると危ない目に遭ってるし……」

ちよつと、溜息ためいきは失礼じゃない

危ない目に遭ったのは、貴男あなたの所為せいなんですから！

ぎつと睨むと、それを受け止めた彼は真顔おそで恐ろしい事を言う。

「俺の”特別”を危ない目に遭わせた奴やつら全員に、

裏から手を回して退学に追い込むのは苦労したんだよ？」

聞き間違いかなあ。

そうであつてほしいなあ。

「君を守る程に、体も頭も強くなった。だから俺の”お姫様”にもう一度なつて。」

うわっ！

この眼は本気だ。危険だ。

私は彼に手を握られたまま考える。

この危険人物は今までの経験からして簡単には振り切れない。

じゃあ、どうするのが一番か……制御を失った人格者いいひとほど恐ろしい物はない。

だったら私が制御するしかないっばい。

いやだ。

もの凄く嫌だ。

でも、それ以外に手は無いような気がする。

（さすがに、退学は駄目でしょう。）

私は彼の手を握り返して誓いちかの言葉を唱える。  
それに破顔した彼は同じく誓いちかの言葉を唱える。

後は、お互いの手に唇を落とす。

私が素早く手短に済ませると彼は不満を隠しきれない様で、眉間みけんに皺しわが寄る。

そして、予想外の行動を取る。

「はわっ！」

彼の唇が離れたかと思うと、舐なめられた。

舐められたというか優しくゆっくりと愛おしむように……  
いやあ……！

「相模さんさがみの変態へんたい！」

「”お姫様”が素っ気ないからだよ。」

王子はしれつとした顔で唇を離し、手を解放する。

本気で危険人物ひとだなこの男は……と考えて、私はこの男ひとを制御  
しないといけない事を思い出す。

まずは、ここからだ。

「相模さん、”お姫様”ではなく前と同じ様に呼んでください。」

お姫様”は禁止です！」

「じゃあ、『みほちゃん』？」

何の躊躇ためらいもなく彼の口から出てきたのは幼い頃の私の愛称。  
私はすかさず訂正ていせいを入れる。

「ちがいます！鈴村すずむらです！」



出会いましたら〰〰過去からの〰〰（後書き）

いつの間にか読者登録して下さっている方が・・・！  
本気で嬉しいです。  
頑張ります〜！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4803y/>

---

空色をかえて

2011年11月30日19時53分発行